

7) ヤブコウジ=藪柑子

ヤブコウジはヤブコウジ科の常緑小低木で高さは10~30cm、長い匍匐枝を出して繁殖する。葉は互生し茎の上部に3~5枚が輪生状につく。葉の先端は尖り、縁には細かい鋸歯がある。夏、葉腋に白色の小花を2~5個下向きに咲かせる。果実は径5~6mmの球形で秋には赤く熟す。このために古くから日本庭園の下草として植えられ、園芸品種として葉に斑の入るもの、葉の形が著しく変わっているもの、白い実のなるものなど、いくつかの変種があり、貴重品扱いされるようになった。和名の由来は藪の中に生え、葉の形や果実が柑子に似ているためで、別称としてはヤマタチバナ、アカダマノキ、フカミグサ、シシクワズ、イチモンナシ、マンリョウ、ヤマリンゴなど多くの別称がある。学名は『*Ardisia japonica*』で、属名は槍先、矢先を意味する『*ardis*』に由来し、雄蕊の形が槍先に似ているために付けられたものである。中国では『紫金牛』(シキンギョウ)で、漢方では煎汁を咳止めや去痰などの呼吸器系の病気、利尿剤、解毒剤にする。また冬でも葉が枯れずに赤い実が美しく着いているために、正月の飾りや婚礼の際の酒樽にも飾られた。武家では元服の髪削ぎの折にも、山菅にこの藪柑子が添えられていたという。

ヤブコウジは『万葉集』や『古今集』でもヤマタチバナとして詠まれている。

あしひきの山橘の色に出でよ 語らひ継ぎて逢うこともあらむ

これは『万葉集』の春日王(カスガノオオキミ)の歌でその意味は、あの山橘の赤い実のようにあなたの気持ちを顔に出してください。そうしたら世間の人も二人の関係を知って、私と逢うこともできるようになるでしょう。と歌ったものである。『万葉集』で詠まれているヤブコウジは、このようにすべて実を詠んだもので、花を詠んだものはない。鬱蒼と茂る森の中で、鮮やかな赤い実が実る姿に、万葉人はある種の神々しさを感じたのだろう。『古今集』にも次のようなものがある。

我が恋をしのびかねてはあしひきの 山橘の色に出ぬべし

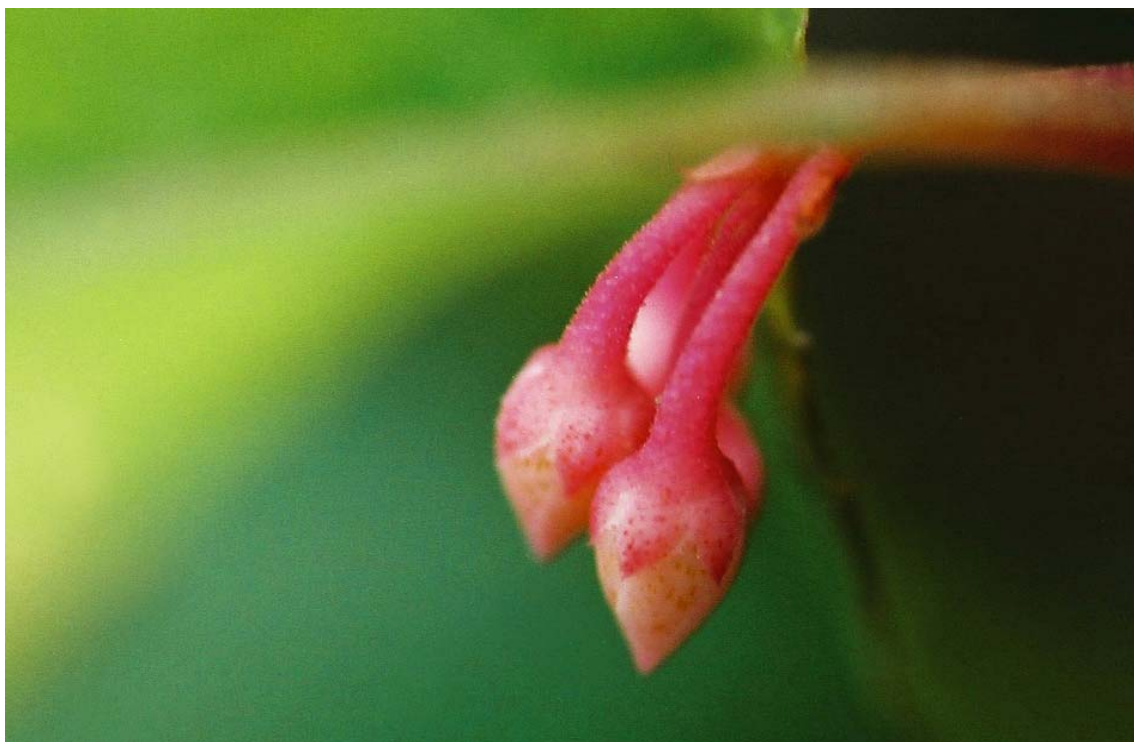
紀友則のこの歌も恋の心が顔に出ることを言っており、花が取り上げられるのは、もっぱら『山橘』ならぬ『花橘』で、こちらの方はミカン科の植物である。

ヤブコウジは江戸時代には園芸種として人気を集め、寛政年間(1789~1801年)になると大流行した。この流行も一旦は収まったものの、明治の中頃になると新潟県で再発し、ヤブコウジの栽培ブームが起こって、一株で3,000円という当時としては超大金で取り引きされるほどに過熱した。このため時の新潟県知事が「ヤブコウジ売買取り締まり規則」なるものを発布して規制に乗り出したほどであった。日本にもオランダのチューリップにあたる事件が起こっていたことは、誠に興味深い。

現在ではヤブコウジの斑入り品種は花屋さんの店先でもよく見かける。小苗ならせいぜい500~1,000円程度で、中には一桁違うものもある。しかし高価なものは特に寒さに弱かったり、栽培の難しいものが多いので避けたほうが無難である。



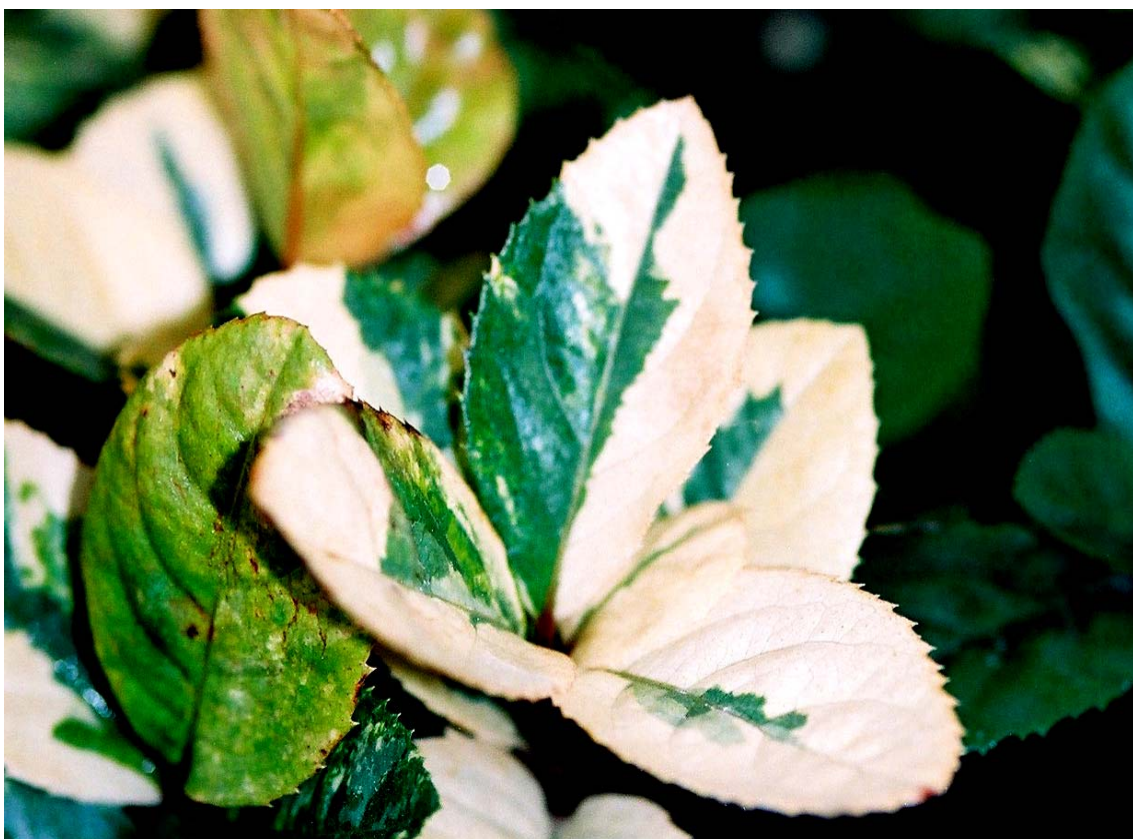
ヤブコウジの花蕾。明治時代にはヤブコウジ一鉢で、家一軒分の値がついたこともあったという。これがとかく話題を提供したヤブコウジの素顔である(さいたま市浦和区)。



生まれてきた子供に長い名前をつけると、長生きできるという落語の「寿限無」(ジュゲム)には、「じゅげむ じゅげむ ごころのすりきれ・・・やぶらこうじのぶらこうじ・・・」として登場する。



ヤブコウジの果実、以前は東京周辺の雑木林でもよく見られた。耐陰性が強く、木陰などでも良く育ち、北海道から九州まで、広く分布する(さいたま市浦和区)。



斑入り葉のヤブコウジには種々のものがある(埼玉県深谷市)。

[目次に戻る](#)